The New Symphony Orchestra 84th Regular Concert

June 2, 1979 7:00P.M.

Cond. Yoshinori Kawachi

Orch. The New Symphony Orchestra

Paul Hindemith

Sinfonische Metamorphosen

Franz Schubert

Symphonie No.7 C-dur

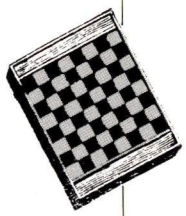
アマチュア・オーケストラ



Hindemith

Sinfonische Metamorphosen Carl Maria von Weber'scher Themen

I Allegro
II Turandot. Scherzo
Moderato
III Andantino
IV Marsch



ウェーバーの主題による交響的変容

アメリカの文化的風土の投影と中国を想像させる異国趣味、ガメラン音楽の効果とドイツロマン派の初期を思わせる抒情、加えて適度な現代感覚を持ったこの楽しい曲は、ヒンデミットがナチスによる圧制から逃れ、アメリカ合衆国へ渡った後の1943年夏に着手されました。

パウル・ヒンデミットは1895年、シレジアから移住して来たドイツ・ハナウの手工業職の家系に生まれ、彼の作風なり音楽生活全体なりには〝高度の職人性〟としか言いようのないものが一貫してついてまわっています。それは意識的でさえあったようですが、それを支える気質や精神に家系の影響があると考えることは不自然でないかもしれません。

彼は高度の教養人でしたが、いわゆる段階的な市民教育は受けたことがなく、ラテン語なども成人してから学んだといわれます。フランクフルト音楽院への入学以前、少年時代に映画館や田舎まわりのオペレッタ団やジャズバンドなどで自活し、最後にはフランクフルトのオペラハウスの第1コンサートマスターをつとめました。その後彼はヴィオラに著しい愛着を感じはじめ、ハンガリー出身のヴァイオリンの名手アマールと組み、彼自身はヴィオラを受けもって、有名な〈アマール弦楽四重奏団〉を組織しました。これは現代音楽の演奏に特別の意欲を持った団体で、10年にわたって当時の新しい音楽に指導的役割を果したのです。

また作曲家としての彼は、1930年頃既に－ドイツの最も新しい傾向の作曲家である－との定評を世界的に得ていました。体質的気質的に彼の音楽を好まない人であっても、その力量のほどは認めざるを得ないといったところが当時の大勢であったようです。音楽史的にみて30才代そこそこでこのような定評を得たことは、早熟の部類に入ると言えますが、このあたりを頂点として、彼の作風はより実践的というか、堅実化というか、(それは彼以上の早熟の天才、昨年の11月の演奏会で新譜を悩ませたR・シュトラウスの場合とはちがって発展的ではありますが) 一見、方向転換のようなものを見せはじめ、ナチスの迫害に続くアメリカ移住とともにその傾向はさらに明瞭となっていきました。〝音楽における革命家〟



ヒンデミット

ウェーバーの主題による交響的変容

I アレグロ
II トランドット スケルツォ
モデラート
III アンダンティーノ
IV マーチ

とさえいわれたほどの急進的な作風をもっていたヒンデミットが、なぜこの時期に積極的な前向きの姿勢から後退したのかわかりませんが、彼が熱心であった教育との関連や作曲家と聴衆との繋がり、さらには以前から主張していたアマチュア音楽家のあり方、又は音楽のあり方をより以上に意識し実践したのは事実です。彼の主張は、「アマチュア音楽家が音楽社会の大部分を占めているのが理想的な時代であって、それは18世紀や19世紀にみられたものであったが、現在ではプロと称する者が多すぎてアマチュア音楽家は1パーセントにしか過ぎない。そうしたアマチュア音楽家に音楽をする喜びを与えるのにもっとも近道なのが合唱であり合奏である。」というもので、いわゆるアマチュアにも演奏できる作品が作曲されたのです。この傾向は職業的な音楽家が演奏するための曲にもあらわれました。それは演奏が容易になったということではなく、聴く人にわかりやすくなったということです。交響組曲『気高い幻影』は、そのいい例となるでしょうし『レクイエム (戸口に最後のライラックが咲いたとき)』もその種のものに数えることができます。『ウェーバーの主題による交響的変容』もその例外ではありません。

この曲の初演はアルトゥール・ロジンスキー指揮のニューヨーク・フィルハーモニーにより行われ、大好評を博しました。

SCHUBERT

Symphony No.9　D.944　C.Dur

Ⅰ　Andante-Allegro ma non troppo
Ⅱ　Andante con moto
Ⅲ　Scherzo　Allegro vivace
Ⅳ　Finale　Allegro vivace

シューベルト

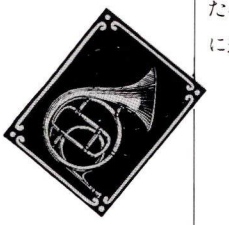
交響曲第９番　No.944「ザ.グレート」

Ⅰ　アンダンテーアレグロ.マ.ノン.トロッポ
Ⅱ　アンダンテ コンモート
Ⅲ　スケルツォ アレグロ ヴィバーチェ
Ⅳ　フィナーレ アレグロ ヴィバーチェ

交響曲　第９番　ハ長調「ザ・グレート」

19世紀初頭、誕生から１世紀足らずして交響曲は発展の頂点を迎えることになります。それがベートーヴェンの交響曲であることはいうまでもありません。そして彼のあと、交響曲のそれ以上の発展は不可能であるように思われました。当時、そのことに決定的な影響をもつような作品は全く見当たらず、ほとんどがベートーヴェンの模倣に過ぎませんでした。シューベルト自身も同時代の音楽家と同様に、「ベートーヴェンのあと、それ以上のことをできる人がいようか…」という共通の思いに苦しめられていたようです。しかしこうした通念を打ち破り、交響曲の領域に次の発展の方向を指し示したのも、シューベルト自身にほかなりませんでした。その記念碑的な作品が彼の交響曲第８番『未完成』とこの第９番です。この二つの交響曲で、彼は古典的なものを基盤として、それに新しい〝ロマン的〟と呼ばれる要素を結合させ、未来の交響曲が進むべき道を示してくれたのでした。

第９交響曲は、ベートーヴェンの交響曲から完全に独立した特徴をもっています。まず何よりもはじめに気がつくことは、この交響曲の、いつ終るとも知れないくり返しと長大さです。その規模の大きさは従来の古典的な次元をはるかに越えています。それだけに、第９交響曲には、ベートーヴェンの交響曲にみられるような組織力や自己批判が欠けているともいわれますが、それを補って余りあるのは純粋な美しさをもつ旋律や和声、それにリズムの圧倒的な力です。そしてこれらは、緻密に構成された形式の中ではなくて、孤立した美しさを持つ諸部分の連続の中に、現われます。しかし、この美しく力強い交響曲も、その成立当初から世に認められたわけではありませんでした。むしろ独創性が禍したともいえます。完成後まもなくシューベルトは、この交響曲をウィーン楽友協会に提出したのですが、あまりにも長く、あまりにも難しいことを理由に、拒否されてしまったのです。そしてシューベルトは、この交響曲が日の目を見ぬうちに夭逝してしまいます。その後もしばらくの間、一般の人々の目にも触れずにいたのです。



1838年の秋、シューマンはライプツィヒからウィーンに出て来ました。生存中にシューベルトと会うことのなかったシューマンは、せめてシューベルトと身近に接していた人と近づきを得たいと思い、兄のフェルディナント・シューベルトを訪ねました。その家でシューマンはシューベルトが残した手稿を多数発見したのですが、その中に第９交響曲が含まれていました。ただちにこの作品の真価を見抜き上演を思い立った彼は、これをライプツィヒに送り、メンデルスゾーン指揮のゲヴァントハウス管弦楽団によって初演されました。この曲は大喝采をもって迎えられ、つづく再演では、ほとんど全市の賞讃を得たといわれます。しかし、このような現象も、ライプツィヒに限られていました。その年の終わりにウィーンにおいて、はじめの２楽章が演奏されましたが、理解されませんでした。1940年代には、各地で上演が試みられたのですが、ロンドンでは最初のリハーサルで楽員たちの嘲笑をもって斥けられ、またパリでは指揮者のアブネックが、第１楽章から先に進むことを拒んだといわれます。
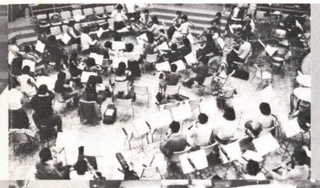


楽しい練習・厳しい宴会



鹿島ハイツ合宿 4/28・29・30





















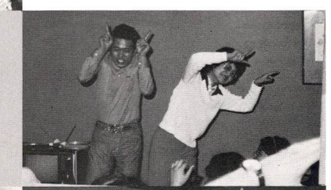




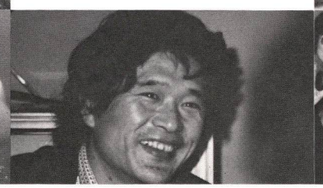










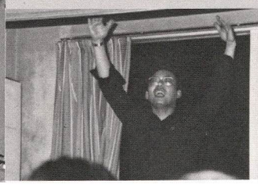














河地良智

1945年生まれ。国立音楽大学器楽科を経て、桐朋学園大学指揮科に学ぶ。指揮を斎藤秀雄、秋山和慶、ホルンを千葉馨、和方寛茂、ピアノを原口歌子の各氏に師事。1973年、第３回民音指揮者コンクールに入選、奨励賞を受賞。1974年、バンクーバーのサマー・スクールに講師として招かれたほか、ヨーロッパ演奏旅行を行い、帰国後、二期会東京公演、Ｎ響定期演奏会などの副指揮者として活躍。その後、札幌交響楽団、群馬交響楽団、桐朋学園大学、洗足学園大学、東京混声合唱団、二期会などの各オーケストラ、合唱団の指揮台に立つ。1977年８月、イギリスのアバディーン音楽祭に出演し成功を納める。1978年８月、慶応ワグネル・オーケストラを率いて、スイスのルッツエルン800年音楽祭に参加したほかヨーロッパ各地を演奏旅行。11月、東京室内歌劇場定期公演でイベールの歌劇、「アルジェリック」を振り好評を博す。新響団員の信頼は厚く、1977年からは『新響指揮者』として音楽監督芥川也寸志と並び演奏会に登場し、いまや新響になくてはならない人となった。活躍の期待される若手指揮者である。

新交響楽団

1956年３月創立。会社員、主婦、教師、学生など様々な職業を持つアマチュアのプレーヤー、110名程で構成されているオーケストラである。創立以来、音楽監督芥川也寸志の献身的な指導のもとに、ソビエト演奏旅行の他、九州、沖縄等の国内演奏旅行、ベートーベン・チクルス、ストラビンスキー３部作一挙上演等を行なった。1976年には創立20周年記念演奏会として、「日本の交響作品展」と名付けた２夜にわたる演奏会により、第８回鳥井音楽賞を受賞。演奏、企画、運営において最高水準のアマチュア・オーケストラをめざしているが、困難な問題を多数かかえている。

新交響楽団　第85回演奏会

曲目　A.オネゲル　交響的楽章　パシフィック 231
芥川也寸志　交響三章
P.チャイコフスキー　交響曲第６番ロ短調　作品74　「悲愴」

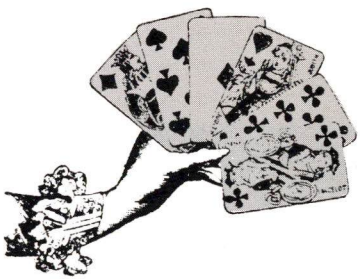
指揮　芥川也寸志

演奏　新交響楽団

日時　1979年８月４日(土) 7:00PM開演
東京文化会館大ホール
指定席 1,000円　自由席 700円

団員募集

新交響楽団では、今、若いあなたの力を待っています。年４回の定期コンサート、年２回の団内演奏会など、決して楽しむだけの活動ではありませんが、オーケストラとして、常により良い演奏を目指しています。
今回は特に次のパートの増強を狙って募集します。
〔Vn, Vla, VC, Fg, Tp, Hr〕簡単なオーディションあり。
連絡先：PM八時～十時
〇四七四－六二－八八七九　橋谷　幸男
〇三－八二三－四一一〇　伊藤　博子



なぜ新響？

土曜の朝は荷物が多い。週休２日制の職場でない私は毎週楽器を小脇にかかえ、譜面をつっ込んだバックを肩に通勤する。職場の机の脇に楽器を置き、仕事をする。同僚達は「又、きょうも上野で練習なの？」と言う。忙しい毎日の中で、なかなか思うように個人練習も充分に出来てはいないが、合奏練習に参加することに意義があるのだと言いきかせながら上野に向かう。バスと電車を乗り次ぎ、一時間程で会場へ到着する。公園口に降り、目の前の東京文化会館の通用口を守衛さんにあいさつをして通り過ぎる。地下のＡリハーサル室が今日の練習場。

もうその中は音の洪水。「おはよう」とか「こんばんは」とか奇妙なあいさつが飛びかっている。入口で出席簿に〇印をつけて入っていく。以前は人事マネジャーがつけていたのだが、最近は自己申告制を取っている。練習開始30分位前から、いすを並べ、楽器を運び込み、準備を始めている。譜面台を並べるころには、ほぼメンバーはそろう。チューニング（音合わせ）をし、さあ、これから練習が始まる。指揮者の棒が振りおろされたその時、老若男女を問わず、どのような職種かも問わず、同一の体験が、100余名の胸の内を奏ではじめる。音楽というただ一つの共通の言葉で会話がはじめられる。しかし現実はきびしく我々の技術を持ってまるで到達しがたい頂きが急に見えたと思ったとたん、指揮者は突然音楽を止める。そしてたとえば、こんな風に言う。「練習番号Ａの３小節前からもう一度やってみて下さい。」「チェロとバスの人だけやってみて下さい。」「その三連符はもっと歯切れよくタタタ、タタタと一つ一つの音符を大事に弾いてみて下さい。」「リズムに乗り遅れないように！　アッ、そんな所に、アクセントをつけないで！」「その部分のｆ（フォルテ）というのはＰ（ピアノ）の中のｆだから大きすぎないように。」……歌を交えながら、決して言葉だけでなく、身ぶり手ぶりを使って体全体で表現して、我々をシューベルトの世界に近づける。

練習後、人々は三々五々駅へ向かい、食事をしたりあるいは飲みに行ったり思い思いに散っていく。楽器を倉庫にかたづけたり、トラックに乗せるのも我々の仕事。最後まですべて自分達でやる。団費は1,500円。演奏会時には切符を売る売らないにかかわりなく負担するノルマもある。決して楽しいばかりの練習ではない。なぜ私達はこんなにオーケストラをやりたいのだろうか。

苛酷な一日の終りに、
しばしリザーブ

めいっぱい行動した日の終章は、できるだけ穏やかでありたい。
データイムにこびりついた心と体の疲れを除き去るため、自分自身
にやさしくしてやる。1本のリザーブと、ひとつのグラスを用意
する。そのまろやかな液体の、ひとしずく、ひとしずくが、やさしく
胸にしみて行き…「また明日も」と、意欲が満ちてくるのです。

責任ある人々の心をほぐす **サントリーリザーブ**
3,000円



価格は標準的な小売価格／製造・販売 サントリー株式会社